

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

谷 憲一

【所属】(助成決定時)

一橋大学大学院社会学研究科

【研究題目】

現代イランにおける「世俗化」とイスラーム復興に関する人類学的研究
—敬虔なムスリムの集会活動に着目して—

【研究の目的】(400字程度)

イラン・イスラーム共和国(以下、イラン)では、1979年の革命以後、シーア派イスラームを国教となり、政策レベルでのイスラーム化が図られてきた。しかし、一般の人々の意識レベルでは、上からのイスラーム化に対する反発もつよく、世俗的な生活を志向する人々も少なくない(これを「世俗化」とする)。これまでこうした世俗的な人々の実践は、国家に対する抵抗として注目されてきた。一方で敬虔なムスリム(イスラーム教徒)の実践は、単に政策の結果とされ、ほとんど注意が払われてこなかった。しかし彼らは単に国家の方針に従順なムスリムであるということではなく、その敬虔さを理解するためには、彼らを取り巻く社会経済的要因や彼らが「世俗化」する社会をどう認識しているのかといった主観的要因を詳しく見ていく必要がある。以上の背景を受け、本研究では、イランの首都テヘランにおける敬虔なムスリムの宗教的な集会活動を対象に現地調査を行い、敬虔なムスリムの宗教的な志向を民族誌的に記述し、「世俗化」とイスラーム復興との関係を、イランの事例を下に再検討する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、2014年10月から8か月間テヘラン市内で現地調査を行い、2014年6月から4か月間は調査結果の分析と文献研究を行った。現地調査では、テヘラン市内のモスクで開かれる、イスラームの学習を目的とした集会(Hey' at)で参与観察を行った。また、その参加者に半構造的インタビューを行い、彼らのライフヒストリーから、彼らの日常生活における価値観やその形成過程、イスラームの集会に参加する動機を明らかにしようと試みた。そこでは特に、彼らが宗教的な実践をするうえで、現代イラン社会をどのように解釈しているのか、それに対して自らの実践をどのように位置づけているのか、また政府やシーア派の教義がイスラーム的/非イスラーム的とみなすものとズレの有無などについて着目した。

近代のイスラーム復興に関する先行研究では、近代的なメディアの登場に伴って、伝統的な解釈とは異なる解釈をする新しい宗教的知識人の存在が議論されてきた。本研究では、集会に参加するムスリムたちにインタビューを行い、彼らが伝統的な言説とは異なる新しい宗教的知識人の議論に触れているのかどうか、またそこからなにを選択しているのかに着目した。

テヘラン市は大きく、下層階級がすむ南部と、中産階級以上が多く暮らす北部とに分けることができる。本研究ではテヘランの南部と北部それぞれのモスクでの、集会への参加者の背景や動機、集会の内容の差異を比較し、社会経済的な要因が参加者の関心や集会の内容に影響を与えているかどうかを調査した。

調査で得られたデータを基に、本研究では近年の世俗化をめぐる議論やイスラーム復興を扱った先行研究と照らし合わせ、世俗化とイスラーム復興に関する研究のレビューを行った。その上で、現代イランにおけるシーア派ムスリムの事例が持つ一般性および特殊性について検討した。

【結論・考察】（４００字程度）

モスクで開かれる集会への参加動機はさまざまであった。その内、定型的に語られる「宗教的な動機」を詳しく掘り下げることで、背後に、参加を通じて得られる人間関係があることが明らかになった。参加者の中には、テヘランで進行する人々の宗教離れを危惧する語りもみられ、これも宗教的な集会への関与の理由の一つとして挙げられる。

おもにスンニ派地域を対象としたイスラーム復興に関する先行研究と本研究の対象との大きな違いは、イランのテヘランの事例においては、12 イマーム・シーア派の伝統的な権威が依然として大きな役割を担っているという点である。またこのことは革命以後の国教化ということだけでは還元されず、革命以前から続く地域に根付いた人々の社交場としての伝統が都市化にも対応しつつ継続していることを示している。

本研究では、宗教的な集会への関与という宗教への志向の一端を示したものの、その一方で進行する「世俗化」がいかんにして起こるのか、という問題が依然として残っている。今後もテヘランにおける宗教をめぐる人々の言説を宗教的な人々だけでなく、世俗的な人々も含めてそれがいかん構築されているのかのメカニズムを探求する必要があるだろう。

（以上）